

# 厚真町

■発災後1年の歩み

■あの時—私たちは②（厚真町関係者インタビュー）

# 厚真町 発災後1年の歩み

〔平成30(2018)年〕

- 9月6日・3時7分、胆振地方中東部でマグニチュード6・7の地震が発生
- 3時15分、厚真町災害対策本部を設置
- 3時40分、地区連絡班に全避難所の開設を指示。町内地区巡回を開始
- 道内全域(約295万戸)が停電
- 町内全域で断水を確認
- 北海道知事が陸上自衛隊北部方面隊に災害派遣要請
- 6時11分、地震発生(震度5弱 マグニチュード5・4)
- 14時30分、災害救助法適用
- 町内小中学校の臨時休校を決定
- 町内こども園の臨時休園を決定
- 15時30分、気象庁が地震発生時に厚真町で震度7を記録していたと発表
- 自衛隊・消防・警察など救助・捜索活動を開始
- 遺体の安置・検視を開始
- 給水車等による給水支援開始
- 炊き出し等による食事の提供開始
- 支援物資の受入・提供開始
- 仮設トイレ設置

- 17時30分、気象庁が「平成30年北海道胆振東部地震」と命名

9月7日・避難所7カ所、避難者1,118人

- 高橋はるみ知事が視察来町

- 厚真町社会福祉協議会が「災害ボランティアセンター」を開設

9月8日・自治会長会議開催

- 自衛隊による入浴支援開始(総合ケアセンターゆくり、厚南会館)

9月9日・安倍晋三首相が視察来町

- 災害ごみ自己搬入の受入開始(23カ所)
- 16時00分、新町地区7世帯に避難勧告発令(10月8日に解除)

9月10日・厚真町災害ボランティアセンターが電話受付を開始

- 最後の行方不明者を発見。その後、死亡を確認
- 洗濯支援開始
- 21時00分、胆振東部地震



安倍首相視察〔陸上自衛隊第7師団提供〕



給水支援〔陸上自衛隊第7師団提供〕

による犠牲者が全道で41名（厚真町36名、札幌市1名、苫小牧市2名、むかわ町1名、新ひだか町1名）に（北海道発表）

町長記者発表

義援金の受付開始

9月11日 上厚真地区浄水場から順次通水開始

厚真町災害ボランティアセンター活動開始

14時00分、東和地区1世帯、宇隆地区2世帯に避難指示（緊急）発令（9月18日に解除）

9月12日 災証明書の交付申請の受付開始

平成30年第3回厚真町議会定例会が流会

新町浄水場から順次通水開始

9月13日 正午のサイレンに合わせて黙とう

役場庁舎前に献花台を設置（9月19日）

12時56分、新町地区3世帯に避難指示（緊急）発令（10月14日に解除）

12時56分、新町地区2世帯

に避難勧告発令（10月11日に解除）

17時00分、新町地区2世帯に避難指示（緊急）発令（10月13日に解除）

9月14日 被災者生活再建支援法適用

9月17日 上厚真地区浄水場から順次

飲用水の通水開始



黙とう

9月18日 町内小中学校4校と厚真

高校で授業再開

町内こども園2園が再開

住家被害認定全戸調査開

始

9月19日 新町浄水場から順次飲用

水の通水開始

9月20日 町、町議会、関係団体に

よる北海道胆振東部地震  
議会・関係団体連絡会議

を開催

臨時災害放送局「あつま災害エフエム」（FM81・4

Mhz）開局

みなし仮設住宅入居開始

9月23日 18時00分、吉野地区8世帯に避難指示（緊急）発令（11月8日に解除）

9月24日 応急仮設住宅説明会

広報あつま平成30年9月  
号発行

9月25日 応急仮設住宅1期分（85  
戸）の建設着工

9月27日 厚真葬苑（火葬場）が稼  
働再開

9月28日 「激甚災害」指定の閣議

決定



あつま災害エフエム



関係機関代表者連絡会議 [北海道新聞社提供]

- 9月29日・台風第24号接近に伴う厚真町緊急対応タイムライン（防犯行動計画）の運用を開始
- 9月30日・り災証明書の交付開始

- 災害ごみ集積所をすべて閉鎖
- 12時00分、台風第24号に伴い17地区151世帯に避難準備・高齢者等避難開始発令



り災証明書の交付

- 14時30分、台風第24号接近に伴い、17地区151世帯に避難勧告を発令（10月1日に一部解除、10月2日にすべて解除）

- 10月1日・総務課災害復興グループを設置

- 生活再建支援制度申請窓口を開設

- 10月2日・給食センターが給食提供を再開

- 国土交通省が「厚真川水系土砂災害復旧事務所」設置

- 10月4日・平成30年第4回厚真町議会臨時会

- 10月5日・8時58分、地震発生（震度5弱 マグニチュード5.2）

- 台風第25号接近に伴う厚真町緊急対応タイムラインの運用を開始（10月7日にタイムラインの運用終了）

- 10月6日・住宅の応急修理受付開始

- 正午のサイレンに合わせて黙とう

- 町長が防災行政無線で町民メッセージを放送



黙とう

- 14時00分、台風第25号接近に伴い、17地区151世帯に避難準備・高齢者等避難開始を発令

- 16時00分、台風第25号接近に伴い、17地区151世帯に避難勧告発令（10月7日に解除）

- 10月9日・水道管の復旧作業が完了

- 10月11日・被災家屋の解体・撤去申請受付開始

- 10月14日・陸上自衛隊、航空自衛隊の災害派遣活動終了

- 10月16日・生活再建支援ガイドブック第1版を発行

- 10月19日・役場本庁舎玄関内に献花台を設置

- 10月22日・安平・厚真行政事務組合じん芥処理場が再稼働

- 10月24日・避難所6カ所、避難者214人

- 10月26日・応急仮設住宅入居説明会

- 10月29日・義援金の配分申請受付開始

- 11月1日・応急仮設住宅1期分入居開始
- こぶしの湯あつま営業再開（露天風呂以外）

- 11月5日・避難所5カ所、避難者97人

- 11月6日・正午のサイレンに合わせて黙とう

- 11月7日・避難所3カ所、避難者86人

- 11月10日・災害ごみ搬出完了セレモニー



陸上自衛隊・航空自衛隊撤収に伴う町民による見送り（北海道新聞社提供）



応急仮設住宅への引っ越し



11月15日・当時の天皇（現上皇）、皇后（現上皇后）両陛下がご訪問

11月30日・応急仮設住宅2期分（41戸）の入居開始

12月6日・正午のサイレンに合わせて黙とう

● 避難所2カ所、避難者36人

12月15日・平成30年北海道胆振東部地震厚真町慰霊式

12月25日・仮設住宅（トレーラーハウス）の入居開始

12月26日・明日への厚真の愛ことば

※ ATSUMA LOVERS ※ 作成

12月28日・厚真町災害対策本部を廃止

● 厚真町胆振東部地震復旧・復興推進本部を設置

### 〔平成31・令和元（2019）年〕

1月21日・応急福祉仮設住宅の入居開始

1月27日・復興イベント「絆く手と手を繋いで頑張ろう厚真」

1月30日・地区ごとの住民懇談会を12回開催（～4月5日）

2月21日・21時22分、地震発生（震度6弱）

● マグニチュード5.8。豊

沢地区（ルーラルビレッジ・

フォーラムビレッジ）断水

（2月23日復旧）

3月1日・厚真町復旧・復興計画策定方



復興イベント

針を策定

3月11日・共同仮設店舗「京町キューブ」利用開始

4月1日・被災された方の総合相談窓口を開設

4月6日・被災家屋等の公費解体の開始

4月22日・住宅リフォーム補助の受付開始

5月1日・こぶしの湯あつまの露天風呂営業再開

呂営業再開

5月8日・鈴木直道知事が視察来町

6月1日・東京2020オリンピック聖火リレー北海道ルートに選出される

6月15日・第47回あつま田舎まつり（～6月16日）

6月29日・災害関連死1件を認定

7月1日・一部損壊以上の家屋等の解体費補助受付開始

7月27日・復旧・復興計画策定に向け町民アンケートを実施

8月8日・吉野地区に献花台を設置

（～18日、9月6日～8日）

8月24日・「第1回あつま復興未来会議」を開催

9月6日・正午のサイレンに合わせて黙とう

● 役場庁舎前に献花台を設置

9月7日・令和元年北海道胆振東部地震厚真町追悼式



被災家屋の公費解体



あつま復興未来会議





吉野地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [北海道新聞社提供]



吉野地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [北海道新聞社提供]



桜丘地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 16 日撮影



朝日・桜丘地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 10 日撮影 [国土交通省北海道開発局提供]



桜丘地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 16 日撮影





富里浄水場  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [北海道提供]



ルーラルビレッジ (豊沢地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



ハスカップ農園 (朝日地区)  
平成 30 (2018) 年 12 月 5 日撮影



道道平取厚真線 (宇隆地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [北海道提供]



道道千歳鷓川線 (新町地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影





富里地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [北海道新聞社提供]





高丘地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 12 日撮影 [北海道提供]



富里地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 10 日撮影 [北海道提供]



東和地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 27 日撮影



地震発生時刻の午前 3 時 7 分で止まった時計 (特別養護老人ホーム豊厚園)



厚真大橋  
平成 30 (2018) 年 9 月 27 日撮影





幌内地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影 [北海道提供]



河道掘削作業 (幌内地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 9 日撮影 [北海道提供]



道路啓開 (幌内地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 14 日撮影 [陸上自衛隊第 7 師団提供]





町道本郷桜丘線  
平成 30 (2018) 年 9 月 16 日撮影



梶里本線 (梶里地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 17 日撮影



新町地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 14 日撮影



障害者支援施設「厚真リハビリセンター」、特別養護老人ホーム「豊厚園」、あつまデイサービスセンター (本郷地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 16 日撮影



旧鹿沼小学校  
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



倒壊した鳥居 (新町地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 28 日撮影



浄化槽 (上厚真地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



美里地区  
平成 30 (2018) 年 9 月 23 日撮影





平成 30 (2018) 年 9 月 8 日撮影 [陸上自衛隊第 7 師団提供]



平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影 [陸上自衛隊第 7 師団提供]



平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [航空自衛隊第 2 航空団提供]



平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [札幌市消防局提供]



平成 30 (2018) 年 9 月 9 日撮影 [北海道新聞社提供]



平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [陸上自衛隊第 7 師団提供]





給水支援(総合福祉センター避難所前)  
平成30(2018)年9月6日撮影(厚真町社会福祉協議会提供)



総合福祉センター避難所内の救護所  
平成30(2018)年9月6日撮影(日本赤十字社北海道支部提供)



総合福祉センター避難所  
平成30(2018)年9月6日撮影(厚真町社会福祉協議会提供)



自衛隊による入浴支援(厚南会館避難所)  
平成30(2018)年9月13日撮影



食事の配給(総合福祉センター避難所)  
平成30(2018)年9月13日撮影(北海道新聞社提供)





厚真中央小学校避難所  
平成 30 (2018) 年 9 月 12 日撮影 (北海道提供)



厚南会館避難所  
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



厚真町スポーツセンター避難所  
平成 30 (2018) 年 11 月 1 日撮影



総合福祉センター避難所  
平成 30 (2018) 年 9 月 13 日撮影



厚真中学校避難所  
平成 30 (2018) 年 9 月 17 日撮影





被災した鹿侵入防止策の再設置  
平成 31 (2019) 年 4 月 27 日撮影



災害ボランティア  
平成 30 (2018) 年 10 月 14 日撮影  
〔厚真町災害ボランティアセンター提供〕



厚真町商工会女性部の炊き出し  
平成 30 (2018) 年 10 月 9 日撮影



支援物資の提供 (あつまスタードーム)  
平成 30 (2018) 年 12 月 8 日撮影



他自治体の応援職員による建物被害調査  
平成 30 (2018) 年 11 月 2 日撮影





本郷仮設団地談話室での体操教室  
平成 31 (2019) 年 3 月 5 日撮影



応急仮設福祉住宅 (新町地区)  
平成 31 (2019) 年 1 月 21 日撮影



表町公園仮設団地  
平成 30 (2018) 年 11 月 4 日撮影



トレーラーハウス  
平成 31 (2019) 年 4 月 24 日撮影



生活支援相談員 (LSA) による巡回訪問  
平成 31 (2019) 年 3 月 5 日撮影





平成 30 年北海道胆振東部地震厚真町慰霊式 (総合福祉センター)  
平成 30 (2018) 年 12 月 15 日撮影



役場庁舎前の献花台  
令和元 (2019) 年 9 月 6 日撮影



献花台 (吉野地区)  
令和元 (2019) 年 8 月 13 日撮影



令和元年北海道胆振東部地震厚真町追悼式 (総合福祉センター)  
令和元 (2019) 年 9 月 7 日撮影



令和元年北海道胆振東部地震厚真町追悼式 (総合福祉センター)  
令和元 (2019) 年 9 月 7 日撮影





震災後初めての稲刈り(東和地区)  
平成30(2018)年10月8日撮影



道道千歳鶴川線(本郷地区)  
平成30(2018)年9月12日撮影〔北海道提供〕



治山復旧工事(東和地区)  
令和元(2019)年9月4日撮影



災害ごみ集積所(新町パークゴルフ場)  
平成30(2018)年10月10日撮影





当時の天皇(現上皇)、皇后(現上皇后)両陛下ご訪問(東和生活会館前)  
平成30(2018)年11月15日撮影

## 「絆～手と手を繋いで頑張ろう厚真」



厚真町復興イベント「絆～手と手を繋いで頑張ろう厚真」(総合福祉センター)  
平成31(2019)年1月27日撮影



共同仮設店舗 kyoumachi cube (キョウマチキューブ)



厚真川水系チケッペ川直轄砂防工事  
令和元(2019)年8月2日撮影(国土交通省北海道開発局提供)

## 心から笑顔を取り戻せる

## しなやかな町としてよみがえるために

厚真町長 宮坂尚市朗



——災害対応の初動について伺います。

突き上げられるような揺れで「役場が倒壊しているのではないか」そんな心配をしながら家を出ました。午前3時半過ぎに厚真町役場にたどり着きましたが、庁舎はしっかり建っていましたし、自家発電機が稼働して明かりも点いていましたので、少しだけほっとしました。

まずは状況を把握しようと職員が地区巡回を行うとともに、避難所の開設を指示

しました。道路の寸断や家屋の倒壊などの報告が入り、深刻な状況であるとわかり始めました。消防署には「下敷きになっているから助けてくれ」「家族が命の危険にさらされている」という出動要請が入っていたので、一刻も早く救出するために消防や自衛隊など関係機関と連絡を取り、夜明けと同時に人命救助ができるよう準備を即座に開始しました。

夜明けとともにテレビには上空から撮った映像が流れ始め、想像以上の甚大な被害であることがわかりました。自衛隊の災害派遣の要請権限は知事にあります。早急に対応するため、自衛隊幹部の方々と直接情報交換しながら対応策を考えました。

自衛隊の捜索が始まったのは午前9時くらいだったと思います。情報が交錯している中で、どの地区にはどの部隊を投入するか、そのためのルートをどう確保するかを災害対策本部で関係機関と協議をしていた状況です。

——行方不明者の捜索は9月10日未明まで続きましたね。

発災当日は午前6時くらいからヘリコプターで救助された方が徐々に避難所へ到着し、その方々の感想からも凄惨な状況が伝わってきました。町職員は人命救助のために全住民の安否確認に当たらせました。被災した方は誰で、どこで、どのような状況にいるのかを把握して地図に落とし、捜索機関と共有しました。



また、避難された方々の命を守るため、水道も電気も通っていない状況の中、とにかく医療機関が稼働できる状態にするよう指示を出しました。まもなく必要な捜索機関、医療スタッフ、DMAT（災害派遣医療チーム）を含むたくさんの部隊には、我々が想像していたより早く駆けつけていただきました。

最終的に捜索活動は4日間になりましたが、誰も二次災害に巻き込まれず、行方不明者全員を見つけ出すことができました。その4日間は、胆振東部地震の中でも非常に大きな意味を持つものだったのではないかと思います。

町では生命・財産を守るため、洪水や津波などの大災害に備えて訓練を重ねてきました。町の防災アドバイザーで東北大学災害科学国際研究所助教の定池祐季さんは、平成25（2013）年に兵庫県にある「人と防災未来センター」のご協力のもとに実施した職員向けの図上訓練が縁で、町内の学校での防災授業等を実施していただきました。平成26（2014）年度からは、防災アドバイザーとして防災教育や地域防災リーダー対象の研修など、本町の防

災の取り組み全般に力をお借りしています。今回の震災は想像を絶するものでしたが、これまでの訓練のおかげもあり、ある程度の確な初動対応ができたと思います。町職員約100名という少ない人数でしたが、事前の研修や訓練が生きたのだと思います。

——行方不明者の捜索では地域の方々が大  
きく貢献されましたね。

今回の震災では、近所の住民同士で救助や安否確認、避難を行った方も多くいます。あれだけ大きな被害が出た中、4日間で捜索活動を終えられたのは、地域の方々から「この家には誰と誰がいて、1階に寝ている人は誰、2階に寝ている人は誰」といった的確な情報をいただきながら捜索活動ができたからです。日頃からのコミュニケーション活動、地域内の人間関係の濃さがこの成果を生んだのだと思います。

自治会活動イコール自分たちの命を守ることなんだ。自治会に加入することは意義のあることなんだと実感できたのではないのでしょうか。この経験をふまえて今まさに、さらに高いレベルの防災意識社会に向け、地

区ごとの防災計画を練り上げているところ  
です。

——避難所についてはいかがでしょうか？

すべての避難所を開けることにしましたが、職員からの被害状況の報告を聞くにつれ、避難所での生活が長期化すると判断し、大型施設の避難所へ集約しました。9



被災状況などについて記者会見を行う宮坂町長（中央）



月7日には人口のおよそ4分の1に当たる1,110人を超える方が避難されていますが、避難所で大きな混乱はなかったと思います。

本部長は災害対策本部から移動しないのが鉄則だと聞いていましたが、発災から2日目の朝にもな避難所を回りました。「今ここについて不便かもしれないけれど、現場には人命救助を待っている方がたくさんいる。命がかかっている状況の方がたくさんいるので、落ち着いて行動してください」と状況を大まかに説明して回りました。これを聞いた方がそれぞれ避難してきた方々に伝え、自分たちもしばらく我慢しようということになったのだろうと思います。

——いち早く発災翌日に災害ボランティアセンターが立ち上がりましたね。

同年7月の西日本豪雨で大きな被害を受けた岡山県倉敷市の災害ボランティアセンターに、3名の職員を8月に派遣していました。職員から「想像以上に大変でしたが、様々な面でボランティアが必要で、マッチングしていくセンターが機能しない

と災害復旧が進まない」と復命を受けたのです。まったくの偶然で、地震の数週間前の話です。

こうしたことが頭にありましたから、被災してすぐに、社会福祉協議会に災害ボランティアセンターの立ち上げをお願いしました。そして「ボランティアはどんどん駆けつけてくる。駆けつけてくる方々はプロなので、学びながらやってください」と言いました。

そうこうするうちに北海道社会福祉協議会も含め各地の社会福祉協議会が駆けつけてくださり、手助けを受けながら体制を整えていきました。のちの感想として「ボランティアの皆さんのほうがプロだった。たくさんの方が本当に親身になって活動してください」という話を聞きましたね。

——町も東北各県の対口支援をはじめ、多くの支援を受けられましたね。

対口支援に来ていただいた方には驚きました。東北は震災復興の途上なのに、わざわざ職員を引き連れて来てくれたことに非常に感銘を受けましたし、実際の体験者ですから避難所の運営について足りないところ、これから想定されるリスク、こういったものも的確に指導して下さり、応急期から復旧期に移行する手助けをしていただきました。

また、国土交通省のTECC-FORCE（緊急災害対策派遣隊）の皆さんには、災害復旧事業の査定業務で助けられました。災害復旧のために短期間に被害額をまとめて申請する業務があるのですが、町職員の土木担当者が4名しかいないため、これは手に負えないだろうと置いていたところでした。TECC-FORCEの皆さんが事前調査をしてく下さり、調査結果をほとんど完成品に近い形で提供していただきました。これで復旧作業についてイメージができるようになりましたので、各地区で地域懇談会を開き、復旧に向けて分野別の目標を皆さんにお伝えすることができました。

——応急仮設住宅の建設はいかがでしたか？

仮設住宅の建設に当初4カ月かかる計画でしたが、北海道には迅速に3カ月で建設していただいたのです。少しでも落ち着いた避難生活を送れるよう全力で支援に取り



組みました。

もう一つ大きなことは福祉仮設住宅です。前例がなかったため、認めてもらうのに時間がかかりました。「今後も自然災害で福祉施設が被災することもあるはずだから、新たな制度をつくってください。我々はその試金石になります」と覚悟を示して、北海道に福祉仮設住宅を建てていただきました。

あらゆる機関には3町で意見を統一して要望させていただきましたので、受け止める各関係機関も対応しやすかったと思います。

—— 11月15日に当時の天皇（現上皇）皇后（現上皇后）両陛下がお見舞いに見えられました。どんなご感想をお持ちですか？

非常に緊張しました。お越しになるという連絡をいただいた時には、本当に嬉しかったです。それまで、町民は徐々に落ち着きを取り戻している状況であったものの、どうしても目線が下を向いている。明るい話がしづらい状況だったことは間違いないと思います。11月15日に両陛下をお迎えし

た喜びが身体からにじみ出るような、そんな町民の様子を見て、ここから厚真町は前向きに変わる、大きなターニングポイントを両陛下にいただいたと思えました。

—— これからの厚真町について抱負をお聞かせください。

今回の震災では、3万人以上の方々が厚真町に駆けつけてくださいました。さらに全道、全国から支援物資やメッセージ、金銭的な支援もあり、本当に大勢の方々に応援していただきました。そうした方々との関係をもっと中身の濃いものにしていきたいと考えています。

応援してくださった方々の手を借り、そして被災者と共に心から笑顔を取り戻せるような新しい厚真町。北海道の食料生産基地として、また、都市部の皆さんにこの大自然を共有していただけるような厚真町。そんな懐の深い、しなやかな町としてよみがえるためにも、色々な関係者の力をお借りしたい。その関係者とのご縁を大事にしていきたいと考えています。



被害状況や復旧事業などを説明した住民懇談会



## 経験したことのない壮絶な状況

## 人とのつながりが救助・捜索活動に生きる

胆振東部消防組合消防署厚真支署警防1係長 田中淳一さん  
 厚真消防団第1分団班長（宇降地区・農業） 高橋清吾さん  
 第1分団班長（東和地区・農業） 尾谷彰さん  
 団員（富里地区・農業） 石井幸秀さん

——地震発生時の状況を教えてください。

田中 発災当時、厚真支署には26人の隊員が所属し、5人で夜勤に当たっていました。



田中 淳一さん

した。仮眠室で眠っていた時に地震が発生し、大の大人が悲鳴を上げたんです。揺れが収まったあと、同僚に非常用の発電機を回すよう指示しました。ぱっと明かりが点くと、辺りはめっちゃくちゃ。ロッカーは倒れ、あらゆる物がフロアに散らばっていました。非常招集のサイレンを鳴らそうとしましたが、電気系のトラブルで使用不能でした。

尾谷 私は自宅でした。今まで経験したことがない揺れで目が覚めました。揺れ



尾谷 彰さん

が収まってから家族全員をリビングに集めました。それから何をすればよいかかわらず、放心状態。現実的であって現実でないような感覚でした。

高橋 とんでもない揺れで、とっさに隣

で寝ていた妻と娘に覆いかぶさってかば



高橋 清吾さん

いました。あらゆる物が倒れてぐちゃぐちゃ。ビニールハウスが気になり外に出ると、タンクが倒れて軽油が流出していました。リフトでタンクを起こしている時に消防のサイレンを聞いたんです。

田中 署のサイレンが鳴らせなかったの、消防車両のサイレンを一齐に鳴らしたんです。

高橋 私はそれを聞いたんですね。

石井 僕も自宅で寝

ていたんですが、家の中はめっちゃくちゃになりました。家族

で片付けをしていると団員の招集の防災無線が流れたので、あとのことは両親に任せて家を出ました。



石井 幸秀さん

——その後、初動としてどのようなことをしましたか？

田中 職員に怪我がないか、サイレンは鳴るのか、出動できるか、車庫のシャッターは開くのかなど、もろもろの確認をしました。団員さんも震度4以上で自動招集されることになっているので、来てもらえるだろうと考えていました。最初の確認が終わる、午前3時25分頃に街中の被害を確認し



ようと職員1隊2名を出しました。そして午前3時40分頃に最初の通報が入ります。吉野地区が大変なことになっていると。

救助隊1隊を編成して出動させたのですが、朝日地区から先に行けない。富里地区から回り込むように指示を出しましたが、このルートも道がふさがっている。どうやっても吉野地区に入れない。どうしようもないので、行ける所から活動を始めることにしました。朝日地区の家が土砂に流されたという通報がありましたから、その捜索に変更しました。そうこうしているうちに、美里地区でも生き埋めが発生した、声がする、と連絡があったので、団員さんに確認に行ってもらいました。この間に木炭窯がつぶれて火災が発生し、職員と団員で消火隊を編成して対応に当たっています。発災から9月10日まで全団員90名が捜索活動や安否確認に当たりました。

——消防団の皆さんはすぐに支署に駆けつけたのですか？

尾谷 まず、地元の自警団として地区の安否確認を行いました。近所の方から「知り合いのばあちゃんが一人暮らしをしている

ので、見に行つてほしい」と頼まれたんです。生き埋めになっているとの話だったので地元の皆さんですぐ救助に向かいました。そのばあちゃんの家は裏山の土砂で流され、ばあちゃんは奇跡的に残った屋根とベッドの間に挟まれていました。近所の人たちが声をかけると、「助けてくれー」という声がかすかに聞こえてきたんです。近所の人にジャッキを持ってきてもらい、屋根を持ち上げました。ばあちゃんの息子さんも消防団員だったので、一緒に屋根の下にもぐり込み、1時間半ほどかけて何とか助け出したんです。この地域には一人暮らしの人が多かったので、そのばあちゃんを息子さんに任せ、私は見回りに出ました。見回りのあとに署に向かったので、着いたのは午前8時くらいだったと思います。

石井 非常招集がかかったので、いつもの東和地区の道から署に向かったんですが、土砂崩れで道がふさがって通れない。迂回しようとして吉野地区に向かいましたが、土砂崩れで、これも通れない。付近を警戒していた富里地区の自警団の人たちに声をかけると、川沿いの農道なら通れるかもしれない、と言います。軽トラがようやく通れる

ほどの砂利道から署へ向かいました。

高橋 道路がめくれたり、橋に段差が出来たり、本当に行けるのか？と思いましたが何とか進み、早い時間に署に着いています。副団長と共にある現場へ行ってくれと指示され、消防の車で向かいました。その家はすでに崩れていました。2階で寝ていた方は助かりましたが、ほかの家族は崩れた家の下敷きに。何度も大声で呼びかけましたが、返答がない。重機や機材もありますがせんから、どうすることもできない。苦渋の決断で、現状を確認して署に戻りました。そうしているうちに富里地区から石井君が来たんです。

——支署に到着してからどのような活動をされましたか。

高橋 土砂崩れで北部には車で行けないと思っていた時に石井君が来たので、「おまえ、どうやって来たんだよ」と聞きました。通れる道があるのならば、富里地区の奥にある高丘地区や幌内地区に行けることになりました。私の叔父が高丘地区に住んでいて心配だったこともあり、調査隊が編成された時、真っ先に手を挙げました。



叔父の家の50メートル手前のカーブが土砂崩れで、先に進めませんでした。リーダーの部長さんに「この先に叔父さんの家があるから、行ってもいいですか?」と言うと「よし、いくべ!」

土砂を越えると、あるはずの家がない。血の気が引きました。半分泣きながら駆け下りたんですが、叔父さんと息子さんの返事がない。ところが、叔母さんは2階で寝ていたようで無事だったんです。頭に怪我をしていたので、そのまま町内の病院に連れて行きました。

石井君がああ農道を使って来てくれたかったら、その道が通れるという情報が1時間でも遅れたら、部長さんが「いくべ」と言ってくれなかったら、叔母さんは生きていなかったかもしれないと感じました。

石井 私は富里地区に住んでいるので、富里地区と幌内地区の様子を見に行くことになりました。富里地区では地元の人が土砂崩れの現場に集まっていたので、誰が行方不明だとか地域の状況を聞き取って、幌内地区に向かいました。ここでも幌内マナビイハウス（公民館）に地元の方々が集まっていたので、状況を聞き取り、無線を

使って署の指揮本部に連絡しました。

署に戻ると、吉野地区に行くように指示されました。そこも土砂崩れで家が数十メートル先の田んぼまで流されているんです。土砂の中から屋根が出ていたので、見える範囲で鉄板を剥がしてみたんですが、下手な所を触って崩れても危険ですから、結局何もできない状態でしたね。

田中 午前4時台のまだ暗い時間帯でしたが、署に私一人になる時間帯もありました。「家が崩れて流れそうだ」という通報が入ったんですが、「人員も車両も出払っており、今は行けません」としか言えませんでした。25年間消防に勤めていますが出動できないのは初めてです。強い無力感を覚えましたね。

——当日の午後からはどのような活動になりましたか?

田中 当日の昼までに自衛隊、警察、消防の広域応援隊が到着していたので、幌内地区の捜索を分担して行うことになりました。土砂崩れで地形が変わってしまったので、自衛隊・消防庁の航空写真やグーグルマップのストリートビューで地震前後を比

較し、家の位置を推定して作業に入りました。

尾谷 初日は手掘りです。道が崩れていまずから、重機が現場にたどり着けません。石井君の発見したルートが唯一ですから、そこも車両が通るたびに状態が悪くなっていきました。

高橋 家や道路が完全に土砂に埋まってしまい、どこに何があるのかわからない。「屋根があるからこの辺りだろう」と思って掘っても見当違いだったり、泥だらけの木を切ってチェーンソーがすぐに切れなくなったりしましたが、早く見つけてあげたい——その思いだけでした。

また、報道機関の車両が捜索現場に長蛇の列をつくっていたので、到着まで時間がかかり、大変困りました。

田中 本来であれば消防団員さんだけで現場に向かってもらうようなことはありませんが、緊急事態ではそうは言っていただけません。ふだんからの信頼でお願いしました。尾谷 消防団として役割以上のものを求められた意識はなく、消防団に入った以上、やるべきことをやらなくてはならないという思いです。消防団だからこれ以上やって



はいけないという意識は一切ありませんでした。

高橋 僕ら消防団員は団長の訓示で「我々の使命は町民の命を守ることだ」と聞いていましたが、まさに、これがそうなんだと、あとから実感しました。

——この地震を経験して、今思われていることを聞かせてください。

尾谷 地震を経験して、ふだんからの防災意識は高まりました。そして、人と人のつながりの大切さを実感しています。

高橋 ふだんからの備え、そしてふだんからの隣近所の付き合いの大切さ。あのようになってしまうたら、自分一人ではどうしようもできないですから。

石井 今回は団体として救助する側でしたが、今後、身近の誰に助けてもらうことになるかわからない。そう思うと、つねに周りの人のことを考えて大切にしていきたいなと感じました。



重機で捜索する緊迫した現場【札幌市消防局提供】



被災現場で活動する職員・団員【胆振東部消防組合提供】

田中 一瞬にして起こった広域の土砂災害への備えが難しかったです。僕らにとっては重たい教訓です。防災には「自助・共助・公助」が大切だとよく言われますが、震災で「共助」の大切さを身に染みて感じ

ました。僕らの手が回らない時に、自治会の皆さん、近所の皆さんの助けが必要なんだと改めて思いました。



## 全道の避難先やご支援をいただいた 皆さまの思いを糧に

社会福祉法人 北海道厚真福祉会  
障害者支援施設厚真リハビリセンター 支援係長 武田裕人さん  
特別養護老人ホーム豊厚園 主任介護士 久保朋子さん

——法人の概要を教えてください。

武田 北海道厚真福祉会は、昭和52（1977）年に設立認可を受け、翌年1月に「障害者支援施設厚真リハビリセンター」、昭和63年11月に「特別養護老人ホーム豊厚園」を開業しました。現在はその二つの事業所に加えて「あつまデイサービスセンター」「厚南デイサービスセンター」「あつま居宅介護支援事業所」を運営しています。



武田 裕人さん

——お二人はどこで地震を迎えましたか？

久保 私は特別養護老人ホーム豊厚園の主任介護士として入居者の介護や介護職



久保 朋子さん

員のマネジメントを担当しています。震災直後は町内の自宅にいて、目が覚めるのと同時に揺れが始まりました。

武田 私は厚真リハビリセンターで相談員兼支援係長として勤務しています。震災当日は夜勤で仮眠を取っていました。この日、厚真リハビリセンター、豊厚園には夜勤者がそれぞれ3名、宿直1名の合計7名が勤務していました。

ものすごい揺れで目を覚まし、被害状況を確認しようとしたのですが、照明が点きません。暗闇に目が慣れても、舞い上がったちりやほこりで視界が遮られました。懐中電灯を使って利用者の安否を確認したところ、誰も負傷しておらず、ひとまず安心しました。ボイラーの配管が破損しており、ガス漏れによる火災の危険があるた

め、すぐに利用者の避難を開始しました。

——どうやって利用者全員を避難させたのですか？

武田 両施設合わせて111人（豊厚園のシヨートステイ3人を含む）の利用者がいるうえに自分で歩ける人が少なく、避難は容易ではありませんでしたが、その時は「何とかしなくては」という使命感に駆られ、無我夢中でした。豊厚園は1階、厚真リハビリセンターは2階に入居棟があるため、「避難用すべり台を使う」「背負う」「抱きかかえる」「ベッドごと移動させる」など、利用者さんの状況に応じて避難させました。

午前4時30分頃に全員の避難が完了しました。少ない職員で避難させるのは大変で



したが、もし火災が発生していたらと思うと、今でもぞっとしますね。

——その後、どちらに避難したのですか？

**武田** 厚真リハビリセンターの避難場所として本郷ナビィハウス（公民館）を確保しました。前日、そこで利用者の葬儀を行っており、鍵を借りていたのでスムーズに避難することができました。

**久保** 豊厚園の利用者は厚真町スポーツセンターに移動しました。寝たきりなど重度の利用者は、近隣にある他法人のデイサービスセンターに避難させていただきました。

スポーツセンターの体育館では、避難している一般の町民から少し離れた場所を豊厚園の専用スペースとして確保していただきました。プライバシーが保てるようカーテンで仕切りオムツの脱着を行いました。が、やはり施設とは勝手が違います。状況が理解できず、混乱されている利用者があり、周りの町民に不安を与えないようパーティションを設けました。私たち職員も、この先いつたいていどうなるんだろうという大きな不安を抱えていましたが、利用者には不安な顔を見せられないので、「どんなこ

とがあっても、この困難から逃げずに乗り切らなくてはならない」という思いで日々を過ごしていました。

——町内の避難所にどれくらい滞在したのですか？

**武田** 老人福祉施設協議会や、北海道社会福祉協議会などを通してたくさんの方が受け入れを申し出てくれたため、その日のうちに全道約10カ所の施設に避難を開始しました。高速道路が使用できないので、一番遠い新得町へも一般道での移動でした。

災害を想定していくつかの法人と防災協定を結んでいましたが、このような形で現実になるとは思っていませんでした。

——分散避難の苦勞をお聞かせください。

**武田** 避難先となる施設すべてに職員を配置しましたが、家庭の事情などで家を空けることができない職員もいたため、初動の人員確保が困難でした。シフトを組んで職員を固定配置できるようにするまでは、とりあえず可能な限りの人数を送り出し、避難先の職員さんと相談しながら何を行えば



豊厚園／厚真リハビリセンターの敷地内の地割れ  
〔北海道厚真福祉会提供〕



発災後の豊厚園の介護職員室〔北海道厚真福祉会提供〕





厚真リハビリセンター入居者の避難所、事務所として利用していた本郷マナビィハウス

よいかを考え  
るなど、手探  
りの状態でし  
た。

施設内に職  
員が泊まれる  
スペースがあ  
る場合は交代  
で駐在しまし  
たが、宿泊で  
きない北広島

市や岩見沢市などの施設には通いました。  
かなりの負担だったと思いますが、避難期  
間は仮設住宅が完成する平成31（2019）  
年1月21日を目標としていたので、それま  
で頑張ってもらうほかありませんでした。

避難先の嘱託医や看護師さんに利用者の  
健康管理をお願いしましたが、パソコンが  
壊れて情報を引き出すことができないのが  
難点でした。カルテに記載されていない既  
往歴などを記憶から書き起こしたり、支援  
員が避難施設の看護師さんと薬の内容を相  
談したりするなど、ふだん行わない業務が  
必要になりました。

避難先も停電による非常事態にあったの

ですが、感謝しきれないほど温かく迎えて  
くれました。少ない人員でケアしている私  
たちに配慮してくださり、利用者の入浴介  
助を行ってくれるなど、人的支援、物資支  
援、環境支援、メンタル支援などにご尽力  
をいただきました。

——震災の翌月に応急福祉仮設住宅の建設  
が決定しましたね。

久保 利用者さんも厚真町へ帰りたがって  
いましたし、避難先まで通勤する職員の負  
担も大きかったので、みんなが生活できる  
応急福祉仮設住宅の話は朗報でした。多く  
の職員は先行きが見えない状況に不安に  
なっていたので、再建を目標に頑張ること  
ができました。

武田 施設利用者がまとめて入ることがで  
きる仮設住宅は過去に例がないそうです。  
一般的な仮設住宅は横並びに棟が建設され  
ますが、この福祉仮設住宅はホールや事務  
室、食堂、浴室などがある「共有棟」と  
「住居棟」が渡り廊下で結ばれており、介  
護や支援を行うための動線が確保されてい  
ます。バリアフリー構造で埋め込み式の浴  
室や特殊浴槽も設置されており、使い勝手

はこれまでの施設と遜色ありません。

——応急福祉仮設住宅は災害救助法上、新  
規利用者の受け入れができないそうで  
すね。

武田 それが一番大きな問題です。震災当  
時は豊厚園60人、厚真リハビリセンター48  
人が入所していましたが、今は豊厚園48  
人、厚真リハビリセンター39人に減少して  
います。デイサービス事業も従来通りの営  
業が難しく、週3日・1日7名の利用に縮  
小しました。減収は法人の運営を圧迫しま  
すし、「利用したい人が利用できない」と  
いうセーフティネットが満たされない問題  
も発生しています。

様々な問題が山積していますが、「この  
逆境を乗り切ろう」というムードになり、  
経営状況や避難を理由に離職する者はいま  
せんでした。むしろ震災前よりも結束力が  
強くなったように感じます。

——新しい施設の入居に向けてどのような  
お気持ちですか？

武田 令和2（2020）年12月20日から  
順次入居しますが、利用者さんが新しい施



設に慣れるまで時間がかかりそうです。本来であればこの2年間でたくさんの思い出をつくることができたのに、避難生活でそれができませんでした。コロナ禍でやれることが限られています。失った時間を取り戻すことができるような、楽しいことを計画したいと思っています。

——長かった避難生活で思い出に残っていることはありますか？

武田 全道が停電し、誰もが大変な状況を過ごしている中、多くの施設の方々が私たちを温かく迎え入れてくれたことを感謝しています。震災直後に利用者さんの家族、私たち職員の家族、OBやOGが駆けつけて食料や物資を持ち寄ってくれたことも嬉しかったです。直接的な支援以外にも物資や義援金など、たくさんの方々が手を差し伸べてくれたことが前に進む原動力になりました。

久保 避難させていただいた施設の職員さんが「疲れたでしょう」と声をかけてくれ、温かい食べ物を提供してくださったこと。夜勤をしている時も「私たちが見守っているから、少し休んでいて」と気遣ってくれたこと。着の身着のままの姿で避難し

た私たちにお風呂をすすめてくれたり、ドラッグストアで下着を買ってくれたりしたこと。避難先の施設で受けた一つひとつの親切が心に刻まれて、鮮明な記憶として残っています。

——震災の体験から得た教訓があれば教えてください。

久保 火災などの避難訓練は実施していましたが、大地震のような災害が発生する

と、自分たちだけでは乗り越えられないところがたくさん出てきます。停電が起こるなんていうことは想定していませんでしたので、「懐中電灯を多く用意すればよかった」など、あとから反省することもたくさんありました。

震災では災害に備えた「準備」「協力」「連携」「支え合い」が大切です。日頃から備品の用意はもちろん、協力し合える体制や連携づくりが不可欠だと思います。



応急福祉仮設住宅



令和2年12月にオープンした新施設

## 「自分事にする」視点の大切さを学びました

当時 厚真町災害ボランティアセンター副センター長  
(現 厚真町社会福祉協議会 高齢者生活福祉センター長・生活支援担当主幹)

山野下 誠さん

——ご経歴を教えてください。

厚真町で生まれ、

本州の大学へ進学し

ました。平成8年、

厚真町社会福祉協議



山野下 誠さん

会に入職したのを機に帰郷。以後、ボランティアや地域福祉関係の業務を担当し、地震があった時は、事務局次長として被災された方の生活支援に当たりました。

——地震発生時の状況を教えてください。

本郷地区の自宅で寝ていました。地震で目が覚め、すぐに東日本大震災を思い起こしました。とにかく激しい揺れで、私が住んでいるのは築40年の家でしたので、倒壊するのではないかとという恐怖が頭をよぎりました。

——発災直後、何をされましたか？

揺れが収まり、家族の無事を確認してから外に出ると、すでに近所の人たちが声をかけ合っていました。私はすぐに社会福祉協議会が管理するグループホームなどの高齢者施設に向かい、入所者さんの状況を確認したあと、事務所の様子も見に行きました。事務所内は書棚が倒れ、書類が散乱するなど、ひどい状態でした。

陽が昇ってからは、とにかく情報を得るために奔走しました。停電でテレビは見られず、情報源はカーラジオのみで、何が起きているのか詳細がわからない。厚真町が一番大きな揺れを観測していたということを知ったのも、あとになってからでした。厚真町役場から入ってくる情報も限られていましたから、車で地域を走り、各地の避難

所などに直接足を運びながら少しでも状況を把握しようと思いました。時間が経つにつれ、誰々が亡くなった、行方不明だということが口伝えで伝わってきましたが、現実のこととして受け止めることが難しい気持ちでした。

——災害ボランティアセンターの開設はどのように進めましたか？

当初は各所で緊急対応と混乱が続いており、町とも十分な打ち合わせをすることが難しい状態の中で災害ボランティアセンターを立ち上げの準備を進めることになりました。ニーズ把握はこれからという段階でしたので、準備をしても方が二不要だった場合には関係各所に謝って回ることも覚悟しました。とにかく「立ち上げ」を決めないことには何も進められないことから、社会福祉協





マッチングを待つボランティア (厚真町社会福祉協議会提供)

議会として災害ボランティアセンターの開設を判断し、各地から支援に駆けつけていた関係者の力を借りながら準備を始めました。

—— 山野下さんは副センター長として、

ボランティアとの調整に奔走されましたね。

9月7日に立ち上げを決めたあと、私自身はボランティアの問い合わせや関係者との打ち合わせなどで身動きが取れなくなりました。社会福祉協議会のスタッフが手分けをして地域や避難所を回り、被災状況や安否の確認をしながらニーズ把握をしていたのですが、精神的にも肉体的に限界に近い状態でした。

9月11日から、本郷地区の旧かしわ保育園を拠点に本格的な業務を開始しました。フェイスブックで発信したあと、電話は鳴りっぱなしで、膨大な量のメールが届きました。

災害ボランティアセンターには給水や食料運搬など様々なニーズが寄せられました。が、中でも多かったのは家屋内の片付けでした。倒れた家具を移動し、壊れた家財を指定された集積場まで災害ごみとして運び



災害ボランティアセンター本部で業務を行う山野下さん

ました。

土砂が流れ込んで大きな被害を受けた家屋や瓦礫の中から貴重品を取り出すような活動は、一般のボランティアでは対応が困難で、重機を扱う技術と専門的な知見を持つボランティアの方々の方も借りました。

—— ボランティアとのマッチングはどのように行ったのでしょうか？

家財の運び出しは10名、資材の運搬は3名というように、それぞれの活動に必要な人数を割り振るのですが、センターに詰め



ダンボール家具のワークショップ (厚真町社会福祉協議会提供)

かけたボランティアの皆さんに並んでいた  
だいて「この仕事やってくださる方はいま  
すか？」と聞き、手を挙げてくださった人  
を順に割り振っていくというやり方でした。  
寄せられるニーズ数とボランティアの  
人数のバランスを調整することが難しく、  
順番が後ろの方には次の依頼が来るまで待  
機してもらったこともありました。  
数日が経つうちに、資格や技術を持って  
いるボランティアさんを把握しながら内容  
に合わせてマッチングできるようになり、  
流れもスムーズになりました。

—— ボランティアセンターの運用で、特に  
ご苦労された点や印象深い出来事はあ  
りますか？

災害ボランティアセンターに寄せられる  
相談の中には、専門性が必要なものや生業  
に関わることなど、災害ボランティアセン  
ターが直接対応することが難しい内容もあ  
りました。例えば、被災された農家の農作  
業は災害ボランティアセンターの役割を超  
えていると考え、対応に悩みました。被災  
されて大変に困られていたことは間違いな  
く、もっと何かできたのではないかと今も  
考えます。また、作業に必要な人数とボラ  
ンティアの人数の調整にも苦労しました。

地震による家の片付けは人数が多ければ  
多いほど、早く終わるといふわけではありま  
せん。家の中の家財には住人の財産が混  
じっていて、何もかも捨ててしまうわけには  
いきません。必要か不要かを丁寧にお聞  
きする必要がありますが、特に高齢の方  
に沢山のボランティアさんが矢継ぎ早に「こ  
れはどうですか？」と尋ねても混乱するだ  
けです。とにかく、被災された方のペースに  
合わせた関わり方をボランティアの皆さんに  
はお願いしていました。



応急仮設住宅への引っ越し作業

発災以降、様々な経験や知識を持つ団体  
の協力をいただきましたが、一人ひとりの個  
人ボランティアの力も頼もしいと感じました。  
特に印象深かったのは、震災のすぐあと  
の冬に行われた町主催の「グラントバザー  
」での活動です。救援物資を被災者の  
方々に提供する会場で、ボランティアの  
方々が炊き出しやヨーヨーすくいなど、子  
ども向けの縁日の企画をしてくださったん  
です。見ず知らずだったボランティア同士  
が厚真町のためにと協力し、企画してくれ





ボランティアによる子ども縁日(厚真町社会福祉協議会提供)

た取り組みがとも印象に残っています。震災から2年経過した現在も、災害ボランティアセンターの活動は続いています。応急期は過ぎ、現在は生活のための支援窓口の役割を果たしています。必要としている方が一人でもいれば、寄り添い続けていくことが大切だと思います。

—— 今回の震災をきっかけに「支え合いセンター」も新たに設けられました。

厚真町社会福祉協議会では、災害ボランティアセンターのほか、応急仮設住宅の建設に合わせて道内初となる生活支援相談員(LSA)を配置し、被災された方々の相談支援にも携わることになりました。そして生活復旧の支援へと移る中、地域コミュニティの再構築を目的として、令和2(2020)年4月に支え合いセンターを新設。震災によって地域コミュニティにも大きな被害を受けましたが、地域、ボランティア、社会福祉協議会の各部署が連携して地域の再生、復興に取り組もうとしています。

平成31(2019)年1月から、地域包括支援センターの運営を町から委託されたことで、機能的にも拡充し、職員体制も大きくなりました。大切なのは、それぞれが抱えている課題を共有することです。窓口での相談や訪問活動、サロンなどを通じて得た課題、災害により改めて問題が浮き掘りになったのと同時に、取り組んでいく体制が出来たのは、災害支援での経験が大きいと思います。

—— 最後に、読者にメッセージをお願いします。

今回、ボランティアの皆さんの力に大いに助けていただきました。遠く離れた地であろうと、被災された方を見過ごさない「自分事にする」視点の大切さを学びました。大切なのは費用対効果や災害の規模だけじゃない、一人ひとりに寄り添うことなのだ、と。

災害が再び起きた時のために、つねに勉強を続けていきたいと思えます。厚真町のためだけでなく、次にまたどこかで起きるかもしれない災害に知識や経験を活かしていくことが大切だと思います。



災害ボランティアセンターに寄せられた応援メッセージ

## 日頃から助け合い・支え合いができる 子どもたちを育てる

上厚真小学校長 井内宏磨さん

——地震発生時は宿泊学習に同行されていたそうですね？

5年生と私を含め3名の教師で、日高町の国立日高青少年自然の家に滞在していました。ドーンと衝撃を感じて目覚め、スマートフォンで調べると、安平町が激しい揺れに見舞われたとわかりました。「厚真も大変なことになっているだろう」と教頭に連絡すると、すでに学校の解錠をして校内巡視の最中でした。「大変なことになっています」と。



井内 宏磨さん

避難所の開設を指示し、教師の安否確認を午前4時過ぎに終えました。すぐに厚真町へ戻ろうと考えましたが、道路の安全確認が必要で、スクールバスも身動きが取れ

ません。それでも当日の正午頃には厚真町に戻ることができました。

——厚真町に戻られてからはどのように行動されましたか？

まずは、電話やメールを使って児童の安否確認を行いました。休校の実施やその時期、今後の対応について決定する必要があったものの、町の教育委員会と連絡がつきにくく、混乱がありました。翌日、町内4校の校長が集まり、安否確認の状況や、今後の対応について話し合いました。

——地震後の学校運営はどのように行いましたか？

参考にできるものがない中で、インターネットが有用でした。阪神・淡路大震災後

の取り組みなど情報を収集し、それを基に、先生方には児童のケアに入ってもらうことができたからです。

幸運だったのは、兵庫県教育委員会の震災・学校支援チームが、すぐ当校に来てくれたことです。児童の見守りや心のケア、地震被害に遭った場所の片付けなど、とにかく人手が必要な状態でしたから、彼らの豊富な知識と経験には、本当に助けられました。教員に向けて講習会を行っていただけでも、大きかったです。

——多くの支援が学校に集まり、助けられたと聞きました。

週明けの9月10日頃に人づてにボランティアの支援をお願いしたところ、方々から多くの人が駆けつけてくれました。お子



さんのいる先生は余震の不安の中、子どもだけを家庭に置いて勤務することはできません。また、避難してきた方々も、家を片付けるのに幼児を連れて帰っては、作業がなかなか進まず大変です。子どもの相手をしてくれたボランティアの皆さんに助けられました。地震の3日後くらいには、NPOが炊き出しに来てくれました。温かいおでんやステーキ丼を配給してくださり、そして気さくに声をかけてもらえたことが心の支えや活力になりました。

### ——震災後、児童のケアはどのように行われたのですか？

地震に対する恐怖や避難所生活でのストレスが心配されました。地震発生から5日後の9月11日に、保護者同伴でレクリエーションを開催しました。子どもたちは友達ちとも会えませんが、避難所で大声を出して遊ぶこともできません。学校という場所で仲間と遊び、交流することでストレスを軽減し、心のケアになればという目的がありました。児童だけでなく、保護者同士も顔を合わせることで安心できる場になったようです。

登校再開後も、継続的に心のケアに努めました。「よく眠れているか」「急に悲しい気持ちになることはないか」などをアンケートで尋ね、その結果や児童の様子から、心配な子どもには積極的に声をかけをしてもらいました。

### ——震災後の校内の環境整備はどのように行いましたか？

校内の復旧の時に、大きな余震が来ても問題ないように配慮しました。今回の地震で、玄関のトロフィケースが倒れて避難経路をふさいでいました。強い思い入れはありますが、命には代えられません。安全を最優先に、撤去や備品の配置を見直しました。

10月5日にも震度5弱の地震が発生しましたが、倒れたり落下したりする物はありませんでした。そんなこともあって、子どもたちは落ち着いて避難行動をしています。逆に「学校は安全な場所だ」という安心につながったのかもしれない。子ども達の心の中にある不安が薄くなっていくのを感じました。



被災時の上厚真小学校前

— 9月18日の授業再開に向けて、どのような取り組みをされましたか？

9月10日に、先生たちに家庭訪問を指示し、児童や家庭の状況を確認してもらいました。情報はホワイトボードで共有し、何が学校にできるかをみんなで考えました。

「9月18日から授業再開」という方針が9月11日に町教育委員会から伝えられ、すぐに準備を始めました。私たちが預かっているのは命——このことを職員と確認し、特に余震発生時の対応、校舎の安全確認、心のケアの3点に力を注ぎました。学校再開当日、全校集会で子どもたちの顔を見た時、目頭が熱くなりました。それは、どの職員も同じだったのではないかと思っております。

— 体育館を避難所として使用している中で、授業再開でした。困難なことはありましたか？

避難所を開設していた2カ月間は体育や音楽の授業の工夫は必要でしたが、特に問題はありませんでした。その経験がコロナ禍の今に生きていると感ずるぐらいです。

避難所で暮らしている児童もいました。

避難所の体育館はドアで仕切られ、玄関も別にあるので学校生活との仕切りは明確でしたが、それでもプライバシーには気を遣いました。当然、ご家庭のことも気になります。私たちがどこまで踏み込んでいいのか……。

でも、子どもの笑顔や元気は必ず保護者や地域を勇気づけると思っていました。「子どもにも笑顔を、上小から灯りを」をキャッチフレーズに、先生方は親身に対応してくれましたと思います。

— 保護者に対してはどのように対応しましたか？

発災から数日経って、子どもにとっては周りの大人がとても大切な存在であるという気持ちになりました。地震で子どもが感じるのは恐怖です。でも、大人は「仕事ができないんじゃないか」「もうこの家に住めないんじゃないか」など、現実が見えるだけに不安が募ります。大人の方が見えないんじゃないのかな……と。しかし、大人が歩みを止めたら、子どもは前に進めません。学校だよりで「一緒にがんばりましょう」というメッセージを出し、避難所を回



上厚真小学校避難所

る先生たちには高齢者の方にも積極的に声をかけていただくようお願いしました。

— 震災後、子どもたちに防災について考える時間をつくられたと聞いています。

今年（令和2年）は9月4日を「上小防災の日」として、全学年で防災学習を行い





自衛隊にお礼状を渡す児童たち (厚南会館避難所前) (上厚真小学校提供)

ました。1、2年生では、防災カルタを行って基本的な避難行動を理解し、「自分の命は自分で守る」という自助の意識を育てていきます。3年生は、身近な安全を見直す地域の安全マップを作りました。安全への取り組みには公助があることを理解します。高学年では、崩壊した山林に植樹をしたり、避難所の運営などについて考えたりして、共助が大切なことを学んでいきます。

詰め込まれた知識だけでは対応できないことがあることを、この震災は証明してくれました。自分にできることを考え、周囲と助け合って物事を前に進めていく力を育てることが、一番の「防災教育」です。

—— 今回の震災を経験して、教育に大切なことは何だと思えますか？

震災後、本校は二つのことを大切にしています。一つ目は「主体性、協働性、実践力」です。先ほどの自分で考え、助け合っで行動する力のことです。二つ目は「あいさつ、返事、整理整頓」です。今回の震災で、地域のつながりの大切さを改めて認識しました。災害時、最後に力となるのは人と人との支え合い。ふだんから、自然と支え合うコミュニケーションになっているかが重要だと思えました。

あいさつや返事など基本的なコミュニケーションができないと、災害時やいざという時に人と協力し、助け合うことができません。整理整頓ができないと、発災時に身の危険が生じます。震災を経験し、当たり前前のが非常に重要だと感じています。また、災害時だけでなく誰かが困って

る時、「あの人に相談すれば、話を聞いてくれて、一緒に先に進んでくれる」と周囲から思われるような人に児童たちが育ってほしいと思います。

主体的に地域の復興、発展に取り組む人材を育てること。学校がしなければならぬ役割を保護者や地域の皆さんの力をお借りして果たしていきたいと思っています。



各支援団体による物資の配給や炊き出しが行われた上厚真小学校前 (北海道提供)

## ふだんの自治会活動が災害時の強みに

豊丘自治会

山路秀丘さん  
松田伯明さん

——お二人のご経歴を教えてください。

山路 元教員で、現在はボランティアで学習塾の講師を務めたり、NPO法人で



山路 秀丘さん

森林保護活動を行ったりしています。震災のあった平成30（2018）年には、豊丘自治会の自治会長を務めていました。

松田 私は農家。個人だけでなく、共同で農地を管理して作物を育てる活動も



松田 伯明さん

行っています。山路さんの前の平成29（2017）年の自治会長でした。

——豊丘地区は、どのような地域でしょうか？

山路 豊丘地区には31世帯90人ほどが暮らしています。農家が多く、家業として古くから営んでいる人もいれば、新規就農された方もおり、様々です。ふだんから、近所の農家の種まきや田植え、芋掘りなどを自然と手伝う関係です。

松田 農家として実稼働しているのは10戸ほどでしょうか。ほかに勤めに出ている、高齢で農家を引退した方もいます。こうした中で使われなくなった農地を活用し、共同で農業を行う任意団体があり、私はそちらでも活動しています。

——地震直後の状況を教えてください。

松田 私は自宅で寝ていました。タンスが倒れる被害があったものの、家自体は一部損傷で済みました。停電になったので、夜

が明けるのを待って近所を見に行くと、道路が大きく傷んでいて、驚きました。

山路 私も同じく自宅で就寝中でした。洋服ダンスが倒れてきましたが、ベッドに引っかけて止まったんです。ベッドではなく、床に布団を敷いて寝ていたなら、タンスの下敷きになっていたかもしれません。家の裏で土砂崩れが起こる危険性があったので、公民館である豊丘マナビイハウスに妻と二人で避難しました。その後3週間、避難生活を送りました。

——豊丘マナビイハウスの避難所の開設時ほどのような状況でしたか？

山路 私と妻がマナビイハウスに着いたのは、朝5時頃と記憶しています。すでに町職員が2名、到着していました。町や消



防、自衛隊などの動きが非常に早かった印象を持っていきます。東日本大震災以降に国や自治体の防災体制の整備が進んだ成果として現れたのだと思います。

**松田** 安否確認も、豊丘地区に住む町職員がすぐに限なく回っていました。ただ、道路がめちゃくちゃになっていたので、段差に引っかかってタイヤがパンクしたり、車体が壊れたり、相当苦労したようです。

**山路** マナビィハウスで昼夜を過ごしたのは結局、私の家族だけだったんです。自宅で生活を続けている人がほとんどでした。中には、自宅前にテントを張って過ごした人もいました。ただ、給水、炊き出し、物資の支給の拠点はマナビィハウスでしたから、自然に人が集まり、情報交換をする場になりました。

—— 発災直後、大変だったことは何でしょうか？

**松田** 地震から2日ほどは電話もつながらず、とにかく情報が入りませんでした。ラジオから流れてくるのは札幌や東京発のニュース。ですから、肝心の地元の情報がわからない。町の防災行政無線から給水や

食事の配給情報が次々と流れてきましたが、電気や水道の状況をはじめ、交通や食事の配給も先行きが見えず、みんな不安がっていました。

**山路** 2日経ったあたりから、テレビで地元の情報が報じられたりするようになりましたから、それらの情報や防災行政無線で放送される情報などをまとめる必要性を感じました。そこで私は、マナビィハウス前に情報を書いたホワイトボードを掲示したり、手書きで新聞を作り、住民の皆さんに配布したんです。毎日、A4用紙1枚に給水車が来る時間、自衛隊が用意してくれた風呂の情報、ごみの捨て方など、あらゆる情報を盛り込みました。手書き新聞の発



避難所となった豊丘マナビィハウス

行は、水道が復旧して、自衛隊の給水車が引き上げる9月28日まで続けました。今振り返ると、この手書きの新聞は「いつ、何が、どうなっていたのか」を刻々と記録した資料となっています。

——物資や食糧の状況はいかがでしたか？

山路 幸いにも農家が多いので、米や野菜が不足することはありませんでした。それに、マナビイハウスでは発災直後も数日間、水が出たのです。給水車が来る前に住民の皆さんに水を配給できたのは、大きかったと思います。豊丘地区に住む飲食店や商店が、冷蔵庫の電源が切れたために長期保存ができなくなった食糧を炊き出し用に提供してくれたのも、ありがたかったです。

松田 炊き出しでは、みそ汁におかずなど、普通の食事が提供されました。皆さん、やはり食べに来ていましたね。

——地域の主要産業である農業への被害は  
いかがでしたか？

松田 不幸中の幸いですが、地震の時は水田からちょうど水を抜いたタイミングで、

電気や水が必要な時期ではありませんでした。また、収穫後の真冬でもなく、稲をサイロで管理する時期ともずれていたのので、豊丘地区ではその年のお米は無事に収穫し、出荷することができました。震災直後に田んぼに応急処置を施したため、翌年の作付けにも影響は少なかったです。

——ふだんの自治会活動が役に立ち、震災への対応がスムーズに運んだようですね。

山路 その通りです。豊丘地区では、毎年9月3日が秋祭りです。前夜の宵宮よいみやは、屋台を出したりカラオケ大会をしたりと、かなり大がかりなイベントです。90人しかない自治会なのに、宵宮には400人近くが集まります。炊き出しや物資の配布では、祭りを毎年運営してきた経験が生きました。防災講座で「地域のお祭りをがっちりできる地域は災害に強い」と耳にしました。

松田 大事なのは、自分たち、仲間同士でどう助け合っていくかだと思うんです。日頃から地域の仲間の顔が見える関係だったので、今回の震災では安否確認や高齢者への

の食事の配給など、様々な場面でスムーズに進めることができたのだと思います。

——この地域ならではの緊密なつながりが役に立ったということですね？

山路 豊丘地区では、祭り以外でも様々な共同作業を日常的に行っています。マナビイハウスの整備や道路や川の草刈りなども、住民が協力してやっています。決して防災や訓練のために行っているわけではありませんが、ふだんから作業を共にしていることで、いざという時に力を発揮できました。不安な気持ちにならずに、みんなと一緒に立ち向かえた。これが私の思う「田舎の良さ」ですね。住民同士が日常的に横のつながりを大事にしているから、何かあった時には強いのです。

——震災を経て、次の世代に残したい教訓があればお願いします。

松田 災害発生から最初の24時間、48時間をどう乗り越えるかという点が大変重要だと感じました。救援が来るまでの間は、自分たちで乗り切らなくてはなりません。災害はいつでも起こりうると、日頃から意識



18/9/8(水) 安心とよおが #7 - 無事を祈る...

**水** 警報をのぞき、水首が開通! 放送があるまで、飲みません  
 飲むようになるまで 給水はつづきます (マナビの前お7時~夜7時)  
 10L、ホウレンソウ用30L、ホウレンソウは使用後戻して下さい

**災害ゴミ** マナビ前 酒樽 → 旧室の森保育園へ (9/17 30 町民福祉課)  
 燃える、燃えないの分別、  
 クレタのは、缶、ロシ、灯油タケなどの油もの、タイヤなど  
 マナーを守りましょう!

**ボランティア** ①090-  
 ③社協 → 27-3986, 26-7501

①不審者、サギ、悪質商法に注意 → 今所、被害の報告はないが...

②ことば → 学校、こども園再開... ことばのようすに注意し、言葉を加減しよう  
 ・放課後児童クラブ... 今日~PM6時まで一親の迎えが必要

**災害・被災証明** ①災害... 建物(家屋、作業所など) 国家の支援  
 ②被災... 家具、家電、門扉、車両、土地など (和歌山県など)  
 今日から災害証明にかかわる役場の全戸調査が始まります  
 ※写真もとっておき、証明書発行時に窓口で提示  
 ・問い合わせ... 総務課 27-2321 (内線131, 132)  
 ・場所... 総合センター (ゆくり) 作業相談室 10:00~17:00  
 (昨日の記簿の名字に... 町民福祉課)

**道路、川の草刈り** 延期します 23(日)に予定していたが延期です。  
 日程が決り次第連絡します。

☆何かあたり... 役場(本部) 27-2321  
 (山路... 菊地...)

山路さんが支援情報等を手書きでまとめた新聞



豊丘マナビハウス前で待機する自衛隊の給水車

を持ち、備えをしておく必要があります。また、災害時に住民へ正確な情報を伝達する仕組みづくりが、今後の課題だと思います。噂や臆測はパニックを招きます。大まかですので、精査された情報を伝え、住民に落ち着きを取り戻してもらおう働きかけが災害時には必要ですね。

**山路** 災害の記憶を風化させないことが大切です。震災から2年半が経ち、この地域も落ち着きを取り戻しつつありますが、当時のことを改めて掘り起こし、まとめていく作業はこれからだと思います。また、犠牲になられた方々の家族や先の見通しが立たない高齢者など、災害後も長

期にわたって問題が解決していない人々がいいます。そのような人たちのことを忘れずにケアをしていかななくてはならない、地域で支えていかなければならない。次の世代の人たちには、この点をぜひ理解していただきたいです。

# ATSUMA LOVERSの一人として 復興と再建の歩みに伴走していきたい

厚真町防災アドバイザー  
(東北大学災害科学国際研究所助教)

定池祐季さん

——厚真町との関わりを教えてください。

私は阪神・淡路大

震災を契機に設立さ

れた、神戸市にある

「人と防災未来セン



定池 祐季さん

ター（以下、人防）の元研究員で、現在はリサーチフェローとして人防の活動に関わっています。人防は災害調査・研究に加えて被災自治体の支援活動や、災害対応に関する研修も行っています。厚真町は何名もの職員がこの研修を受講しており、平成24（2012）年の9月に「人防の研修内容を基に、厚真町役場で職員向けの訓練をしたい」と、町の総務課職員から人防に相談がありました。当時、私は北海道大学に勤めていたので、人防から「近くにいるリサーチフェローとして関わってみませんか」と連絡があり、平成25（2013）年2月に実施した訓練に向けてお手伝いをしました。その後、町内の避難訓練に参加したり、小中学校の防災授業を実施したりする機会がありました。平成26（2014）年から町の防災アドバイザーの委嘱を受け、3年間、ほぼ毎月、厚真町に通っていました。「防災・減災のために人を育てる」という町の方針に感銘を受けましたし、厚真の景色や町の人々の素晴らしさに触れるにつれ、どんどん厚真町が好きになりました。プライベートで行くようにもなりまし

た。平成30（2018）年11月から再び防災アドバイザーの委嘱を受け、現在も厚真町で防災や復興のお手伝いをしています。

——そして9月6日を迎えました。

地震発生時は、仙台の自宅で原稿を書いていた。わずかな揺れを感じてテレビをつけると、厚真周辺の情報が入ってきた。「情報の空白域は、被害甚大な可能性がある」という原則から「厚真が大変だ」と直感し、すぐに北海道に行く方法を調べ始めます。朝6時過ぎだったと思いますが、人防の現役研究員と連絡を取り合い、リサーチフェローとして同行することになりました。9月7日に人と防災未来センター・関西広域連合の先遣隊と旭川空港で合流し、道庁へ向かいました。

道庁では、各県の先遣隊と情報共有を重ねる中で、「現地を見に行きたほうがよさそうだ」ということになりました。北海道庁での打ち合わせ後に厚真町へ向かい、厚



真町役場に着いたのは9月8日の10時前です。懐かしい方々の顔を見て安心したことはもちろんですが、悲壮感が漂う感じではなく、覚悟を決めて対応している姿に胸を打たれました。

その日は求めに応じていくつかの場所に行かされたあと、北海道庁の会議に間に合うよう、むかわ町経由でいったん札幌に戻りました。札幌への道中、「厚真町の方々、定池さんについてほしそだったよね」という話になり、総務課長の意向を確認したうえで派遣元と相談し、人防としての支援期間中、私は厚真町を担当、現職研究員は北海道庁と2町を担当し、日々情報共有をするということになりました。

——当初、厚真町ではどのような活動を行ったのでしょうか？

簡単に言うと、歩き回って見聞きした範囲で、その時々に必要なと思われることをしていたという感じですね。最初は厚真町役場内もごった返していて、「空いている場所がこしかななくて……」と案内されたのは、副町長室のソファでした。そこには責任のある主要な人々が集まりますので、話

を聞きながら「こういう資料があります、使えますか？」と提供したり、信頼できるNPO法人を町職員に紹介したり、応援県や関係機関の方々と情報交換をしたりしていました。これまで防災の仕事などでお世話になった国土交通省北海道開発局や気象台の方々に再会し、意見交換できたこともありがたかったです。

また、町内外の会議にも参加していました。厚真町では各避難所に派遣された町職員、応援職員、支援団体などが集まる「北海道胆振東部地震に関する避難所運営（連携）代表者会議（のちに連携会議）」が開催され、日々刻々と変わる状況の中で情報共有と対応策の検討がなされました。

9月13日には「北海道胆振東部地震情報共有会議」が始まりました。「北海道NPOサポートセンター」が事務局を務め、行政、社会福祉協議会にNPOなどの民間支援団体を加えた横断型の会議です。全国各地の災害支援をしている団体も参加しており、現場の課題、他地域の経験を持ち寄った会が持たれていました。

人防の派遣は9月15日で終了したのですが、平成30（2018）年9月は18日間、

10月は15日間という感じで、年内はできる限り厚真町にいるようにしていました。

——厚真町の支援活動をする中で、印象的なことはありますか？

胆振東部地震被災3町に共通する点として、長期間の応援職員が少ないうえに、市町村独自で支援策などを考えなければなら



町職員への講演



あつま災害エフエム

ない状況の中、限られた人材で膨大な仕事に向き合っているという特徴があります。私がふだん接するのは、町や社会福祉協議会の職員が多いのですが、そのような中で町民のために懸命に頑張る姿に胸を打たれています。

人的資源が限られているということもあるのでですが、厚真町では、被災された

町民に向き合う関連する領域の方々の情報共有・連携のための会議が多く持たれているという印象があります。先ほどの避難所の会議もそうでしたし、応急仮設住宅の建設が始まった10月上旬には、「これからの支援のあり方について考えたい」という相談を受けて、町職員、社会福祉協議会職員、町内外のボランティアと意見交換を行う勉強会のお手伝いもしました。その後、厚真町社会福祉協議会には生活支援相談員が配置され、保健所と保健師と社会福祉協議会による支援カンファレンスや、厚真町役場、社会福祉協議会、関係機関、支援団体による「仮設住宅入居者支援会議」が定期開催され、現場から見えてきた課題の検討などが続けられました。

この会議は、令和2（2020）年3月で発展的解消をし、4月からは、「住まいの再建サポートチームコアメンバー会議」として、「災害ケースマネジメント（個別世帯の状況に合わせた生活再建のための支援策の検討と実践）」が進められています。町の保健師と社会福祉協議会のカンファレンスは続いていますし、「北海道胆振東部地震情報共有会議」は「北の国会



第1回あつま復興未来会議

議」と名称を変えて、現在は月に1回オンラインでの情報交換を行っています。

また、令和元（2019）年11月には、町内の子どもを継続的に支えていくための「心のサポート・防災学習推進協議会」が設立され、こども園から厚真高校までの教育機関や、関係機関の連携体制も出来まし



た。他の被災地では県が音頭を取るように取り組みを、厚真町独自で行っているというところに、「町の覚悟」が見えると感じています。

——定池さんは「心のサポート・防災学習推進協議会」にも加わっているそうですが、被災地の子どもへのサポートにはどのような方法があるのでしょうか？

私自身、平成5（1993）年7月に発生した北海道南西沖地震を奥尻島の中学生として経験しました。その時は、「心のケア」のリーフレットが配られた程度でした。災害後の「心のケア」は、平成7（1995）年の阪神・淡路大震災以降に本格化し、東日本大震災の津波被災地では、富永喜喜教授（現兵庫県立大学）と一緒に、私自身が被災した子どもたちへの「心のサポート授業」に関わるようになりました。その時には、奥尻での被災経験ではなく、「当時こういう作文を書いたけれど、実はこういうことを考えていた」という話をし、感想を聞くような形で生徒たちと対話をしました。その中で、「被災とは何か」というような深い話し合いになったことも

あります。

厚真町では、学校再開の準備の折に教育長らの学校訪問に同行させていただきました。先生方のご意見を聞きながら、富永教授に相談のうえで、避難所や学校で活用できる資料を提供しました。学校再開後はスクールカウンセラーと連携しながら、富永教授と共に小中学校で「心のサポート授



心のサポート授業（厚南中学校提供）

業」を実施しました。震災前の防災授業を覚えていてくれた子どもたちもいて、ありがたく思うと同時に、この子どもたちの健やかな成長のために微力ながらお手伝いしていきたいと、改めて感じました。現在は、防災授業の依頼もいただくことがあり、心のケアの観点を持った防災教育の実践にも取り組んでいます。

——最後に、現在の気持ちをお聞かせください。

被災地に関わる研究者は自分の専門にこだわらず、現場の声に耳を澄ませ、その時できる最善を模索し、実践していくことが必要だと、厚真町の方々に教えていただいています。これからは町の未来をつくるために、困り事を抱える人に手を差し伸べるような仕組みと、組織や人々が持っている力が発揮され、それぞれがつながる仕組みを日常に組み込んでいくことが大切だと考えています。

地域の方々が自ら始めていく活動を応援しながら、ATSUMA LOVERSの一人として、地域の復興・生活再建の歩みにさりげなく伴走していきたいです。

